

神の名について

—トマス・アクィナス『能力論』q. 7, a. 4～6—

飯 塚 知 敬

On the Name of God

—Thomas Aquinas : *De Potentia*, q. 7, a. 4～6—

Tomoyoshi IIZUKA

はじめに

トマス・アクィナスは『能力論』*De Potentia*⁽¹⁾の第7問で、神の本質の単純性 *divinae essentiae simplicitas*⁽²⁾について論じている。第1項から3項まで、神の本質自身における単純性が検討された後、第4項から第6項まで、神の「名」*nomen*についての考察を行っている。神の「名」として検討されているのは、例えば「善きもの」*bonum*, 「知恵あるもの」*sapiens*, 「正しきもの」*iustum*といったものである。それは神の属性と考えられる。だがここでの問題は、我々がそれらを神の「名」として考えることができるか、神をそれらの言葉によって呼ぶことができるか、ということである。第4項から6項まで以下の順序で問われている。

第4項 <善きもの, 知恵あるもの, 正しいもの>その他この様なものは、神について付帯性を述語するのであるか。

UTRUM<BONUM, SAPIENS, IUSTUM>ET HUIUSMODI, PRAEDICENT DE DEO ACCIDENS.

第5項 このような名前は神の実体を表示するのであるか。

UTRUM PRAEDICTA NOMINA SIGNIFICENT DIVINAM SUBSTANTIAM.

第6項 これらの名は同義語であるか。

UTRUM ISTA NOMINA SINT SYNOYMA.

ところで、これらの考察においては「もの」と「概念」と「言葉」の関係について、トマスがアリストテレスから継承する認識論的な枠組が基礎にある。つまり、アリストテレスの「言葉は知性の概念のしるしであり、概念はものの類似である⁽³⁾」という枠組である。それ故、トマスの4項から6項までの考察は、この枠組に基づいていると考えることもできる。先ず第4項において「もの」としての神について考察し、付帯性がないことを明らかにしている。次に第5項において、*bonum*といった名の有する「概念」と、神の実体の関係を考察している。第6項において、神について語られる名が、*bonum*, *sapiens*, というように、複数生じてくるのは何故か、その理由について問題にしている。

同時にトマスは基本的に、この『能力論』において、第1項から3項までと同様、アリ

ストテレスのもう一つの重要命題「能動者は自己に似たものを生む⁽³⁾」(agens agit sibi simile)に基づきながら、神と世界の間を捉えようとしている。つまり、トマスはアリストテレスの先の認識論的な命題と、能動者とその結果についての因果的な命題の、この二つの命題に基本的に依拠しながら、この神の名の問題を捉えようとしている。それ故、これらの考察においては、この二つの基本的命題の間に注目しながら、トマス立場を理解してゆかなければならない。しかしその前に、そもそも神の「名」についてどのような問題点があるのかについて、若干の考察をしておこう。

第一章 神の名をめぐる若干の考察

神の名とは何であろうか。例えば、この『能力論』第7問では、神は初めから「第一能動者」primum agensとして捉えられている。それでは、例えばこの第一能動者は神の名と言えるのであろうか。だが『能力論』でも、また『スンマ⁽⁴⁾』でも、トマスはbonum, sapiensなどを固有の名としているが、第一能動者を神の固有の名としてはいない。この理由は何であろうか。

我々は、例えば家を作る人を「建築家」と呼ぶことができる。これも一種の名と言えよう。だがそれは職業の名であって、彼自身の固有な名とは考えられていない。何故なら、それは彼の行為の結果としての「家」から取られた名だからである。つまり、この名は彼を彼として、彼の本質を絶対的に考察して得られた名ではなく、彼をその行為の結果との関係において捉えた場合の名なのである。このように考えると、神を第一能動者と呼ぶことはできるが、それが神に固有の名とは言われない理由も理解されよう。それは、その名が神を被造物との関係において捉えており、神の絶対的な本質を捉え、これを直接に表現する名ではないからと考えられる。

従って、我々があるものに固有の名を命名する時には、そのものの本質認識が先ずなければならないことになる。だから、例えば「人間」というのも、ある意味で「名」と呼ぶことができよう。我々は、人間というものをその普遍的な本質から捉え、この概念に基づいて、それに「人間」という言葉・名を与えているのである。

しかし、このような名も、人間に関しては、我々の日常考えている名前には不十分であるとも言えよう。我々は人間について、その種的な、普遍的な本性から概念を形成して、これに基づいて「人間」という名を与えることができる。だがそれは種全体に対して与えられた名であって、個体に対して与えられた名ではない。人間の場合には更に「太郎」、「花子」といったように個体に対して命名されるのである。だから、このような個体に対する名というのは、人間という普遍的な本性の認識を前提した上で、さらに、個体の特殊性の認識に基づいて形成されると言えよう。例えば、花子とは花のように美しい人間への期待がこめられているというように。

以上のように考えてみると、命名に関してさし当たり次の三つの必要性があることが解る。

- ①固有の意味での名は、ものの働きから、あるいはその結果の認識から取られることはできない。何故ならその場合、そのものは、そのものの結果との関係を通して、相対的な仕方では捉えられ、そのものの本質を絶対的には表示しないからである。
- ②それ故、あるものに固有の名を命名するためには、先ず、そのものの本質を認識しなけ

ればならない。我々はその本質を認識した上で、初めてそのものに本来の名を与えることができる。

- ③だが、人間のように個体の名が問題となる場合には、このような本質認識を前提し、さらにそのものの個体としての特殊性の認識から、そのものの固有の名が与えられる。ところで、トマスにとって神の名が問題となる場合、先ず、①と②とが困難な問題を引き起こす。何故なら②により、人間が神に命名できるとすれば、それは神の本質を認識しなければならない。しかしトマスは、少なくともこの世においては、人間は神をその本質によって認識することはできないとするのである。だから、本来の仕方では、我々は神にその固有の名を命名することはできないと考えなければならない。

だが、トマスは人間は神について全く何も知らない、と述べているわけではない。人間は神の結果、つまりこの世界の認識を通して、神について一定の認識を得ることができるのである。だが、この限定された認識によっては、我々は①の理由により、神の固有の名を命名することはできないのである。例えば、我々は神を第一能動者と呼ぶことはできるが、これは被造的世界との関係で捉えた名であって、神をその絶対的な本質から捉えて与えた名ではないのである。

だから②によっても、また①によっても、人間は神に対しての本来の仕方では命名することはできないと考えなければならない。だから、ここでの神の名をめぐる問題は、神に対して完全な仕方での命名の可能性が求められているのではないと考えなければならない。そうではなく、ここで問われているのはある特定の名について、つまり、*bonum*, *sapiens*, *iustum* といった名について、それらの示すものが何であるか、それらは真なる名であるか、そうだとすればその根拠は何か、などが検討されているのである。

また③との関連で、第6項の問題が生じてくる。第4項で、神には一切の付帯性が存在しないことが明らかにされている。それ故、本来の命名からすれば、神の名はその本質の概念から取られた一つだけということになるはずである。するとトマスが挙げているように神の名が *bonum*, *sapiens*, *iustum* など複数存在すること自体が問題となる。神の本質が複数あるとは考えられない。すると、これらの複数の名は、それらのあるものの概念が実在としての神に対応しない虚偽なる名であるか、それとも、それらはどれも同義語であるか、のいずれかでなければならないように思われる。

以上のような問題点を考えながら、トマスの解答を検討していこう。

第二章 これらの名は神の付帯性を述語するのではない。

トマスは、第4項で、これらの名が神の付帯性を表示するのではないことを、アリストテレスの認識論的な枠組から言うなら、先ず「もの」の側から、つまり神が如何なる付帯性も持たないことから明らかにしようとしている。トマスは、第4項の主文で、神の内に付帯性のないことを次の3つの理由を挙げて説明している。

1) 何かの本質、本性、形相に対して、何かの外的なものが付け加わるということはある得ない。あるものの本質自身に何か外的なものが加われば、その本質そのものが変化するのであり、それはもはや、それまでのものと別の何かになってしまっているはずだからである。だから、あるものが付帯性を持つとすれば、それは本質そのものが持つのではなく、本質、あるいは本性、形相を所有しているところのものが持つのである。例えば人間の場

合、形相と質料との複合体としての人間が、人間性という本質を有しているのであって、この場合、白さなどの付帯性は、その本質である人間性ではなく、本質を有している複合体としての人間が所有しているのである。このようにして、人間など質料的な存在は複合体としての基体が、あるいは個体が、種の本性・本質を持つのであり、そこに付帯性が生じる理由がある。

これに対して、単純実体は質料と形相との複合体を持たない。それ故、そこでは本質を有する基体が、付帯性を持つということは生じない。しかし、被造物であるから、この場合も複合的存在と同様、本質と存在の区別は残る。本質の内に存在は含まれないのであるから、この意味で存在は付帯的なものということができるのである。

だが、神の場合にはその本質と存在とが同一であるから、その本質に外的な何かあるものが付帯するという可能性は一切否定されるのである。

2) 付帯性は実体の本質にとり外的なものである。外的なものとしての付帯性が本質と結合されるためには何かの原因が必要である。今、神に何かの付帯性が到来すると仮定すると、それは何かの原因によらなければならない。そしてその原因は神にとり外的な原因か、内的な原因かのいずれかでなければならない。だが、神にとり外的な原因によることはできない。何故なら、その場合には、その原因の方が神よりもより先なる原因ということになってしまうからである。また、内的な原因によることもできない。というのも、その場合には、神の内において、それに従って付帯性を受け取る部分と、それに従って付帯性を原因する部分という二つの部分があることになり、結果的に神の内にある複合があることになるからである。

3) 付帯性は基体に対して、アクトスとポテンチアの関係にある。付帯性は基体のある形相なのだからである。だが、神は如何なるポテンチアの混合も持たない純粹現実態である。従って、付帯性の基体であることは不可能である。

このように三つの理由を挙げて、トマスは、神の内に付帯性はあり得ないことを明らかにしている。ところで、*bonum, sapiens, iustum* といった言葉は、人間に述語される場合には、人間の性質を表示する。それらは、それによって実体がしかじかであると言われるものであり、それ故それらの類は性質であり、付帯性を示すのである⁶⁾。そして、それらは本性に伴ってくるという表示形態 *modus significandi* によって、その意味するところを表示する。

だから、性質という類に属するという表示形態を持ったまま、これらの言葉は神について語られ、神の名であることは勿論出来ない。トマスは、これらの言葉はある完全性、ある現実態から取られるのであり、性質という類に属するということはこれらの概念に不可欠な要素ではないと考える。だから、神について、これらの言葉が語られる場合には性質という類に属するという表示形態なしに、その意味するところを表示すると主張する。従って、これらの言葉は、人間と神について同義的に語られることはできないのである。*bonum, sapiens, iustum*, などが、真に神の名であるとすれば、その名がそこから取られているこれらの名の概念が、何らかの仕方で、神の内なるものに実在的に対応しているのでなければならないだろう。そして、この項で示されたように、神の内には如何なる付帯性もないのだとすれば、これらの名の概念は、神の実体に対応しているのでなければならないことになる。だが、このことに関しては第一章で見たように①と②の問題が生じて来

る。次にこの問題を考察しなければならない。

第三章 このような神の名は実体を表示する

トマスは、第5項で、これらの名が神の実体を表示することを述べている。初めに、これらの名が神の実体を表示しないとする立場として、師・モーゼス⁽⁷⁾の主張を挙げ、次にこれを批判している。ところで、これらの名が神の実体を表示しないという立場は、第一章の①からすれば、むしろ当然の帰結であるとも言えよう。つまり、トマスにとっても、我々は神について、直接にその本質を認識できないのであり、我々は神の結果としてのこの世界の認識を通して、神について知るのである。だから、人間に知られるのは、そのような結果を通しての、結果との関係における神でなければならない。それは、神の本質を絶対的な仕方です捉える認識に基づく名ではないから、それは神の固有の名とは言えないことになるだろう。

トマスはモーゼスの説を次のように紹介している⁽⁸⁾。モーゼスは先ず、神について語られる名について、二つの解釈が可能であるとする。その第一の解釈は次のものである。例えば神が「知恵あるもの」*sapiens* と呼ばれるのは、神の内に知恵があるからではなく、神が知恵ある仕方、この世界、神の結果の世界において働いていることによる。つまり、神が各々のものをそれぞれの然るべき目的に秩序づけるという仕方働いているからである。また神が「生命あるもの」*vivens* と言われるのは、神が生き物の仕方、つまり自己自身から働くという仕方働いていることによるのである。

従って、この場合に「知恵あるもの」「生命あるもの」という名の概念は、先ず、この世界の内に見出される結果から取られる概念である。そしてその結果の類似性 *similitudo* に即して、神について語られることになる。だから、この場合には神の名としての *bonum*, *sapiens*, *iustum* などの概念は、直接に神の類似なのではなくて、直接には結果の類似であることになる。

次にモーゼスの第二の解釈を見てみよう。例えば、神が「生命あるもの」*vivens* と言われるのはこの場合、次のように否定の仕方によって解釈されるべきである。つまり、神が「生命あるもの」と言われるのは、神の内に何かの生命があるということを表示するためではなく、この世界において、無生物が生きているような存在の形態を神から排除するためなのである。同様に神が「知性あるもの」と言われる時、それは神の内に何かの知性が存在することが述べられているのではなくて、非理性的な動物が存在している、そのような存在形態を神から排除しているに過ぎないのである。

トマスはこのように、これらの神の名は神の実体を表示しないというモーゼスの二つの解釈を挙げた後で、この説を次のような理由で批判している。

先ず、モーゼスの第一の解釈について考えてみよう。この場合には、名の概念は神ではなく、結果から取られるのである。すると、神が「知恵あるもの」と呼ばれるなら、同様に「怒れるもの」と呼ばれてよいはずである。神は罰する場合には、怒れるものの仕方働くのだからである。この様にして、この見解によれば、結果としてのこの世界に見出されるものが、どれも無差別に神について語られてしまうことになる。つまり、結果から神の名の概念が取られる場合には、どれが神の固有の名を表示する概念か、判別する手段がなく、一切の名が相対的になってしまうことになる。この場合には、結果的に神に固

有の名はないことになろう。

さらにトマスは次のように批判する。モーゼスのように、例えば神が「知恵あるもの」であるのは、神の内に知恵があるからではなく、神が知恵ある仕方、結果としてのこの世界において働くことによるのだとすると、信仰の教えるようにこの世界に始まりがあるとすれば、神は創造の働き以前には「知恵あるもの」ではなかったことになる。そして、この結論を避けるために、神が「知恵あるもの」であるのは、知恵ある仕方、働くからではなく、知恵ある仕方、働くことができるから、そのような能力を持つからである、と修正するならば、その場合には、神の内に実在する何かに基づいて名の概念が取られることになり、それは神の実体から取られることになる。何故なら、神の内には何らの付帯性もないことが既に示されているのだからである。こうして、この場合には、神の実体を表示しないというモーゼスの立場が崩れることになる。

次にモーゼスの第二の解釈に対するトマスの批判を見てみよう。どんな名も、そのものの種と対立する種を排除するような相違の表示を含んでいる。例えば、ライオンという名は四本足であるということを含み、そのことによりライオンは鳥と異なっている。だから、先の例のように、神が「生命あるもの」と言われる時、それは単に無生物の存在様態が神から排除されているだけだとすると、神は「ライオン」であるとも言われることも可能であることになる。何故なら、この解釈によれば、そのことにより神から鳥のような存在様態が排除されているのであり、このことは正当と考えられるだろうからである。

更に、トマスは一般に否定命題は肯定命題に基礎づけられていることを指摘する。これによれば、神が無生物の存在形態を持たない、ということが真であれば、我々は何かの仕方、神が生命を持つことを知っているのでなければならない。だから、神は「生命あるもの」であるということが、無生物的な存在形態を持たないことであるという解釈の下で、真であるとすれば、我々は実は神について何かを肯定的な仕方、認識しているということになろう。このようにして、実体を表示しないというモーゼスの立場が崩れることになる。

初めに見たように、神の結果からする命名は先の①の理由から、本来の命名ではないのであり、この限りで、神の名は神の実体を表示しないというモーゼスの立場は、当然の帰結のように思われた。しかし、トマスはこれまで見てきたようにモーゼスの立場を批判している。つまり、モーゼスの立場を徹底するなら、神について一切の命名は不可能であり、どのような名も神に対して、相対的でしかないことになる。だが、これはトマスに依れば、事実と反するものである。つまり彼は、一切の名が神について相対的な位置を占めているとは考えていない。あるものを神にふさわしいと考え、あるものをそうでないと考えている。あるいは、神について、単にある種の存在形態を排除するだけでなく、積極的に何かの認識を有していると考えている。

だが、トマス自身も、神について人間が完全な仕方、神について命名することができるとは考えていないであろう。そのためには、神の本質そのものを人間が完全に認識できるのでなければならないからである。しかし、ある特定の名について、それが神の名としてふさわしいかどうかの判断はできると考えている。それ故トマスは、人間の内に神についての何かの認識があることを認めていることになる。では、それはどのようなものなのか、それを見てみなければならない。

トマスは初めに述べたように『能力論』第7問では、アリストテレスの基本命題「能動

者は自己に似たものを生み出す」に即して、論を進めている⁹⁾。能動者が何かを生み出すことができるのは、自分自身が現実態にある限りにおいてであるから、能動者はその結果の形相を何らかの仕方ですべて所有していなければならない。その場合、例えば人間が人間を生み、火が火を生むといった同義的な能動者の場合には、結果の内にある形相は能動者における形相と同一のラチオに即して見出される。

だが、トマスがよく例として挙げる太陽の場合のように、異義的な能動者の場合には、結果の内なる形相は同一のラチオに即して能動者の内に在るわけではない。能動者の内では、より卓越した仕方では存在する。この場合には、能動者の力の全体が結果の内に表出されることはできない。能動者の内において、その形相は結果の内にあるよりもより卓越した様態において存在するからである。

神が第一能動者として、同義的ではなく異義的な能動者であることは当然である。だから、神の一なる力から多様な結果が生じているのであるが、それらのどの結果も、神の力を完全に表示することはできず。それらの形相はどれも、神におけるそれと同一のラチオに即して見出されることはできない。神においてはより卓越した様態で存在する。

だが同時に、太陽の力によってこの世界に生みだされた全ての多様な形相は、太陽においてはその一なる力に即して存在するのであり、太陽の働きによって生じたものは、それぞれの形相に即して、太陽に類似しているのである。だから、神の場合でも、神の種々に区別された結果は、神においては一なる力に即した仕方では合一されているのであるが、結果は、それらの形相に即して神に類似しているとする。

従って、被造物の完全性は、その一にして単純な本質に即して、神に類似している。我々の知性は被造物から認識を受け取るのだから、被造物の内に見出される完全性の類似性、例えば、*sapientia*, *virtus*, *bonitas* により形成される。従って、被造物はそれぞれの完全性により、何らかの意味で神に類似し、我々の知性はこれらの完全性の形象により形成されるのである。

我々の知性が形成されるのは、神の本質そのものによってではなくて、被造物の完全性の類似によってである。神について語られる名が真に名であるためには、その名の概念が神の類似でなければならない。だが、我々の知性の概念が神の類似であり得るのは、我々の知性がそれにより形成される神の結果としての被造物が、神の類似である限りにおいてである。それ故、被造物が異義的な能動者である神の結果として、劣った仕方では神を表示するように、被造物の完全性の類似により形成される我々の知性の概念も、劣った仕方では神の類似であることになる。

我々は第一章の①の理由により、神の結果から神の名を取ることはできないと考えた。しかし①で考察した例は、家という結果から、ある人が建築家と呼ばれる場合であった。その場合に名がそこから取られているものは、家という一定の類・種において限定されたものであり、その場合、我々の知性は家という特殊な形相により形成されるのである。だが、神の名としてここで問題とされているのは、*bonum*, *sapiens*, *iustum* といったものであり、それらはトマスにより被造物の完全性の類似から取られるのである。ここでは完全性という、すべての被造物の内に共通に見出される形相によって、我々の知性が形成され、そこから神の名が得られることが述べられている。

つまりすべての被造物は神により造られたのであり、造られたものとして、何らか神の

類似を表現しているのである。しかし、神自身は如何なる類の内にあるのでもなく、反対にすべての類の完全性を自己の内に含んでいる。それ故、ある特定の形相により我々の知性が形成される場合には、我々はその概念に基づく名により、神の実体を表示することはできない。それはある限定的な原因、つまり被造的な原因を表示することになるからである。だから、神についてその実体を不完全ながら表示すると言われるのは、エンスである限りでのエンスとして、我々がものを捉える場合でなければならないだろう。だから、第一章の①における考察は、被造的な原因の場合に基づくものであり、存在を全体として原因する神の場合には、そのまま適用することはできないのである。だが、我々は特定の形相の他に、エンスである限りのエンスをどのようにして認識するのだろうか。このことがまた問題となろう。だが、この考察はまた別の機会に譲らなければならない。

こうして、トマスは主文において、これらの名は神の実体であるものを表示する、しかし、それは神の実体が我々に認識される限りにおいてであり、実体があるところに即して、完全な仕方では表示するのではないと結論する。

では、第一章で見たように、*bonum, sapiens, iustum* などの名は、それらが共通に一なる神の実体を表示するのであれば、共に同義語ではないのかという問題が生じてくる。このことについてトマスは続く第6項において考察している。次に、この問題について検討してみよう。

第四章 これらの神の名は同義語ではない

トマスは続く第6項で、これらの名が互いに同義語ではないことを説明している。先ず彼は、冒頭にも触れたように、「もの」、知性の「概念」、「言葉」の関係についてのアリストテレスの基本的枠組を提出する。すなわち、概念はものの類似であり、言葉は概念のしるしであるという関係を提示し、それに基づいて説明を行う。

これによれば、ある二つの言葉が同義語であるためには、それらの表示する「もの」と、言葉がそのしるしである「概念」とが、共に同一であることが必要である。ところで、これまで見てきたように、トマスはこれらの名が神の実体という一なる「もの」を表示するとしているのである。それ故、これらの名が同義語ではないとすれば、その理由はものの側からではなく、概念の側に、つまり概念が多様性を持つということの内に求められなければならない⁽⁹⁰⁾。従って、神というものと概念とは、トマスの言うように「実在的に一、概念的に多」*secundum rem unum, secundum rationem multa* という関係にあることになる。

こうして、神というものは一であるが、我々の知性の形成する概念は多様性を持つことになる。概念の多様性に従って一なる神に対して多様な概念が形成され、そこから複数の名が形成されることになる。だが、この場合にも先の第5項の問題と同様の問題が生じる。つまり、我々の知性の内なる多様な概念は、それぞれどこから取られているのか、という問題である。もしも、それら多様な概念が神の実体そのものに由来するのでないなら、それらは、神の内に実在的な対応を持たないことになり、虚偽なる名であることになる。そして、トマスの言うように、それぞれが神自身から取られ、共に真なる名であるなら、一なる神からどうして相互に異なる概念が形成されるのか、ということが改めて問題とされなければならない。

トマスは先ず、これら多様な名は、神の実体そのものから取られているのではない、とする見解を二つ排除している⁽¹¹⁾。それは、神の実体そのものの内に対応するものを持たない故に、虚偽なる名だからである。

トマスが排除する第一の見解は、これらの概念を、類や種などのように知性の志向的な概念とするものである。つまりこの見解によれば、これらの多様な概念は、実在的には一であるものが人間の知性に認識され、その認識された限りでのそのものを、知性が振り返ることにより形成されるのである。それ故この場合、知性はこれらの概念を、知性により認識された限りでの神に帰することはできるが、実在としての神そのものに帰することはできない。従って、このような概念から取られた名は、神そのものの名としては虚偽なる名である他はない。

トマスが排除する第二の見解は、こうした概念の多様性の原因を、神に求めることはできないので、神の結果の多様性に求めようとするものである。これは第5項で見たように、神の名の概念が神の結果から取られるとした見解と基本的に同じものである。この見解によると、例えば、神は「善きもの」とであるとは「神は存在し、善を原因する」という意味であるという。

だが、トマスは、神は善を原因するから善であるのではなく、神が善だから善を原因するのである、と言わねばならないとする⁽¹²⁾。また、神の名を神の結果から取ることに對して、前項のものと基本的に同じ二つの理由を挙げて批判している。

第一の理由は、神が「善きもの」と呼ばれるのは神が善の原因であるから、と言うなら、同様の理由で、例えば神は「天である」とも呼ばれることになる。何故なら、神は天の創造者であるからである。こうして神の結果のすべてから、神の名が取られることになる。

第二の理由は、創造以前には、神をこのような名で呼ぶことができないというものである。前項と同様これを修正して、例えば神が善であるのは善を原因する力を有するから、とすると、これはもはや神の結果から名を取っているのではなく、神の実体そのものから名を取っていることになる。

こうして、トマスは神についての我々の多様な概念は、結果としての被造物からではなく、被造物の内に表現されている限りでの、神の実体そのものから取られているとする。では、一にして単純な神の実体から、どうして多様な概念が我々の知性の内に形成されるのか。

トマスの説明は、基本的に前項の説明と同一である。神はその被造物に対して、異義的な原因だから、神と被造物の間に何かの類似性があるとしても、被造物のどの形相も神の本質の完全な再現には及ばない。それ故、被造物の内にあるどの完全性の概念も神の本質の不完全な類似でしかなく、これと同一のラチオを持つことは不可能なのである。

ここから、トマスはこうした場合には、神の一なる本質がこれらの神の名の多様な概念に対応することができるとし、更にこれらの多様な概念は、我々の知性をその基体 *subiectum* としてその内にあるが、地方、神の内においてこれらの概念を真とする根 *radix* としてある、と述べている⁽¹³⁾。

トマスに依れば、このように神の名の概念が多様となる原因は、我々の知性の側にある。つまり、その在る限りでの神の本質へと到着することができず、神の本質を鏡に写ったものとして、被造物の内に見るという仕方、多くの不完全な類似を通してしか見ることが

できないことによるのである。つまり、人間の知性は神の本質を、その在るがままに認識することはできず、神の本質を一つの概念の下に包括的に捉えることができないことによるのである⁽¹⁴⁾。

第五章 考察のまとめ

我々は第一章で、命名の場合に一般に考えられていると思われる次の三つの必要性を挙げてみた。

- ①あるものに対し、そのものの結果から、その固有の名を与えることはできない。
- ②あるものに本来の仕方では命名するには、そのものの本質を認識していなければならない。
- ③個体についての命名は、本質認識を前提し、更に、付帯性の認識に基づいて行われる。

初めに述べたように、トマスは少なくともこの世においては人間は神の本質を認識できないと述べているのだから、②により我々は神に対して、本来の仕方では命名することはできないということは当然の帰結であり、このことはトマスの考察においても前提されていたと考えられる。

また③については、第4項で神には付帯性が存在しないことが示されたことにより、付帯性から個体に固有の名が取られるという可能性は、神の場合、初めから排除された。だが、このことは神が個体として、他のものから区別されないということでは勿論ない。トマスは、先の第3項において、神はその存在が自存する存在であるという正にそのことにより、他の一切の存在者から区別されると述べていた⁽¹⁵⁾。このことは、第4項で見たように、被造物においては付帯性である *bonum, sapiens, iustum* などが神においては本質的に語られるというような言葉の同義性と異義性の考察に続いて行く。これらの名は、被造物について語られる場合と、神について語られる場合では、その表示形態を異にするのである。これはアナログアの問題と関係してゆく。このことの考察はまた別に為されなければならない。

ところで①については、これまでの考察を通して、被造的で有限な原因の場合と、神の場合とでは異なる側面があることが理解されてきた。このことをもう少し考えてみよう。例えば、人間が家を作るという場合には、家の形相がその人の内にある。我々は家の形相の認識を通して、その人の内に家の形相が存在することを知り、その人が知性と意志を持つ存在であることを認識する。しかし、もしも我々が人間の本質を全く知らないとしたら、建築家といった名は、人間の能力から取られた名として、人間の能力を表示するとしても、人間である限りの人間を表示することはないだろう。こうして、そのものの本質の認識を前提せずに、そのものの結果だけから、そのものに固有の名を与えることはできないと考えられた。

しかし、トマスは人間は神の本質を認識できないとしながら、*bonum, sapiens, iustum* といった神について語られる名は神の実体を表示すると主張する。それは、人間が神の結果の認識を通して、神の本質そのものについて、何らかの認識を得ているとするからである。しかし、神の結果から認識できるのは、神の能力ではないのか。だが、第4項で示されたように、神の内には如何なる付帯性もないのであり、神の能力は神の本質である。だから、神の結果を知ることにより、人間はある限定された意味で神の本質を知るのである。

しかし、この被造的世界はある意味ではすべてが神の結果であると言える。それなら、

どの結果からも神の本質が取られることになり、どの被造物の名も等しく神の名ということになるのではないか。そして結果的に神に固有な名はないことになるのではないか。しかし、トマスが言うように、結果の認識から神の実体が不完全な仕方では知られるとしても、それは個々の特殊な形相の認識によって知られるのではなかった。それは、被造物の持つ完全性の認識によるのであった。それは、個々の形相の原因として神を考えるのではなく、ある結果が存在である限りで持つ完全性の原因として、神を捉えることであった。というのも存在としての完全性は形相だけから来るのではなく、資料だけから来るのでもなく、複合体としての存在者に伴うものであるからである。

また、このような完全性は、この被造的世界においては形相と質料との複合体の内に見出され、また多くの付帯性を伴って見出されるが、単純実体において、また更に、神においてはより単純な仕方で見出されるのである。そして、神の本質はどの特定の被造物においても、同一のラチオに即してその内に見出されることはできないのであり、それが表現されるためには多様な被造物を必要とした。こうして、神の内なる一にして単純なる本質は、様々な被造物を通して表現され、そこからまた神の名も人間の知性にとっては複数となる必然性があったのである。

だが神の名の問題は先にも触れたように、神と被造物について語られる言葉、*bonum, sapiens, iustum* などが、同義的か、異義的か、という考察に密接に結びついてゆく⁽¹⁶⁾。その意味で神の名の問題はアナログアの問題の考察抜きには不十分である。これは、また改めて考察したい。

註

1) テキストはマリエッチ版を使用した。

2) 拙論「神の単純性について、オートアス・アクィナス『能力論』q. 7, a. 1〜3-」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第48号参照

3) *De pot.* q. 7, a. 6, c., *sunt enim voces notae earum quae sunt in anima passionum, et ipsae intellectus conceptiones sunt rerum similitudines, ut patet per Philosophum in principio Perierum.*

ここでは、アリストテレスのテキストに即して、魂の *passiones*, 知性の *conceptiones* と訳し分けているが、トマスはこれらの用語について、知性の *conceptiones* は広義の魂の *passiones* に含まれると解釈している。*In Perierm.* L. I, 1. 2.

4) 拙論、前掲論文。

5) *S. T. I.* q. 13, a. 3

6) *De. pot.* q. 7, a. 4, ad 2

7) Rabbi Moyses, これは Moses Maimonides (1135年, コルドバに生まれる) のこと。

8) *De. pot.* q. 7, a. 5, c.

9) *ibid.* c.

10) *De. pot.* q. 7, a. 6, c.

11) *ibid.* c.

12) トマスはアウグスティヌスの言葉を引用している。*ibid.*, *Unde Augustinus dicit quod quia Deus est bonus, sumus ; et in quantum sumus, boni sumus.*

13) *ibid.*, Et sic omnes rationes sunt quidem in intellectu nostro sicut in subiecto : sed in Deo sunt ut in radice verificante has conceptiones.

このradix, verificareの意味が問題となる。これはまた別の機会に問題としたい。

14) *ibid.*, Dei verbum, quod est perfecta conceptio ipsius, non est nisi unum.

15) *De pot.* q. 7, a. 2, ad 4, Unde per ipsum suum esse Deus differt a quolibet alio ente.

16) *De pot.* q. 7, a. 7, UTRUM HUIUSMODI NOMINA DICANTUR DE DEO ET CREATURIS UNIVOCE VEL AEQUIVOCE. で検討される。